

当院における C 型肝炎ウイルス (HCV) 抗体の検出頻度とその背景

盛岡友愛病院肝臓内科 石川 和克

1) 対象および方法

2023 年 2 月から 2024 年 2 月の期間に、当院を受診した外来患者および入院患者のうち、HCV 抗体を測定した患者を対象に、検出頻度、その背景および臨床的意義について検討した。

HCV 抗体は院内検査室 (定性、immunoblot 法)、外注 (定量、CLEIA 法)、ともに第 3 世代抗体を測定した。

2) HCV 抗体の検出頻度 (表)

I 群の院内定性検査で陽性は、1.01% (6/592)、II 群の外注定量検査で陽性は 2.71% (36/1,326) であった。I 群に比し II 群での検出頻度が高かった。測定対象の年齢分布は両群ともほぼ同じであったが、当院は回復期リハビリテーション患者の占める割合が高く、したがって 60~80 歳代の高齢者の占める割合が高くなっている。

I 群は、入院時や手術前のスクリーニング検査でランダムに提出された検体が多く、II 群は、肝臓外来などでの肝障害のスクリーニングや肝疾患の既往歴を有する患者の検体など、ある程度集約されて提出された検体が多く含まれている。

3) I 群と II 群の背景と HCV 抗体検出の意義

岩手県予防医学協会「ウイルス肝炎専門委員会」の報告によると¹⁾、HCV 抗体の高力価から判定した本県の 40~79 歳における HCV キャリア率は、0.12%とされている (ちなみに 40 歳未満ではほぼ 0%、加齢とともに陽性率が上昇)。それに比し I 群の 1.01%はやや高率となっているのは、当院での対象がさらに高齢に偏っていること、また定性検査であることから、自然経過で

HCV 感染から離脱した、いわゆる既感染の陽性例（現在は HCV 陰性）を含んでいることなどを勘案すれば、本県の HCV キャリア率とほぼ合致する結果と考えられる。

II 群の陽性率が 2.71%と高率であるのは、ある程度集約された検体を対象としていることと、低力価陽性例を含んでいるためと考えられる。事実低力価陽性例には、前述の HCV キャリア離脱例や IFN や DAA 治療による完治(SVR)例が含まれていた。

今後 HCV 抗体が定性で陽性の場合や定量で低力価陽性の場合は、HCV-RNA をチェックし、現在 HCV キャリアの状態か否かを明らかにしておくことが院内感染対策や臨床経過の観察の点から重要である。

- 1) (公財) 岩手県予防医学協会「ウイルス肝炎専門委員会」報告、2022 年。

表. HCV 抗体の各種測定法による検出頻度

	n	陽性	%	年齢 (yrs)
I. HCV 抗体定性 (院内)	592	6	1.01	18~102
II. HCV 抗体定量 (外注)	1,326	36	2.71	21~96

(2023.2~2024.2)